

『状況に埋め込まれた学習～正統的周辺参加』 J.レイブ、E.ウエンガー(1993)

解説 p147～165 福島真人¹

●V. 構造と学習する身体

・社会的行為の様々なレベルに現れる構造性と、即興性のヤヌスの両面を同時に解明するという戦略が、現在の社会科学に求められている課題。

・こうした課題に、最も精力的に取り組んでいる社会学者の一人が、ブルデュー。

・ハビトゥスという概念に、ブルデューは、「構造化された構造であると同時に、構造化する構造」といった念仏のような説明をつけている。

・モースは、文化的な特性というものは、それぞれの身体に叩き込まれていると強調した。

・行為者にとって暗黙の内に学習され、身体化された知。いわば、身体の癖。→ ハビトゥス？

・ハビトゥス：

- 1) 行為がルーチン化され、あるパターンの中に行為の傾向性が織り込まれていく側面 → 構造化
- 2) 状況における瞬時の判断や細かな変化に対して微調整する能力 → 即興性

・ハビトゥスとその形成過程は、何か今一つ、隠喩的曖昧主義の印象を免れないのである。

●VI. 正統的周辺参加と実践共同体

・レイブとウエンガーによるLPPの議論は、ブルデューやギデンズによって推し進められる方向性を全面的に展開しつつ、心理学的に誤解されていた「熟練」というものが生成する社会学的文脈を、明確な形で組織的に呈示した作品と言える。

・レイブとウエンガーの独創性は、「実践共同体」という概念を打ち立て、社会的実践を、そこへの参加の過程ということで、定式化したことにある。

・ブルデューにおいて、抽象的にハビトゥスと語られてきたものは、LPPでは「熟練のアイデンティティ」と呼ばれている。

¹ 筆者は、『状況論的アプローチ③実践のエスノグラフィ』（2001）第4章「状況・行為・内省」の中で、以下のように述べている。「周辺参加論を、学校教育にそのまま適用しているような議論が見受けられるが、理論的にはそうとう混乱していると言わざるを得ない。（中略）学校システムは構造的にモラトリアム的な要素を常に内包している制度である。」

- ・その他、レイブとウェンガーが提起した問題は他にも色々ある。
- ・学校教育という巨大な装置に対し、この理論が全く新しい視点を開いてくれる可能性を人は期待する。

- ・プルデューとパスロンの『再生産』という本と、本書を比較するとよい。
- ・『再生産』の「象徴的暴力」のテーゼでは、レイブとウェンガーの主張を補佐するような観点が多くみられる。
- ・『再生産』では、徒弟的認知と学校のシステムの対立が、正統的文化の押し付けと、それによる非支配階級の実践的な知の排除という形で露骨に論じられている。

●おわりに

- ・コンピューターは、本当に人間の認知活動により近いものであったのだろうか。

 - ・人間=コンピューターというメタファーの有効期限が切れつつある。認知科学のおかげで、我々はいかにコンピューターと異なるかがはっきりしてきた。
-

●訳者あとがき p183~191 佐伯胖

- ・学習と呼んできたことは、特定の「与えられた」教科内容を、特定の子供がいかにして理解に達するかということに焦点が置かれたものであった。
- ・教育の問題を本気で考えると「分かって何になる」「できたからって、それがどうした」という問題にぶつかる。
- ・本書は「考える糸口」を提供している。

1) LPPは、学習を教育とは独立の営みとみなしている。

学習はまさしく学習者自身の営みであって、教師や教室や教材が、学習を「もたらしている」とか「方向づけている」のではない。

2) LPPでは学習を社会的実践の一部であるとする。

つまり学習とは「学びとる」とか「身につける」というよりも「世の中のためになること、いわば仕事をやる」ことなのだという。しかも個人の営みではなく、当人が属したいと願う共同体が想定されているということである。

3) LPPでは学習を「参加」と捉える。学習によって人は何かに貢献する。

学校や教室は、子供が社会や文化の中にある学びの実践共同体にアクセスしていく「橋渡し」の場とみなすべき。

4) LPPでは学習はアイデンティティー形成過程であるとする。

学習とは「何者かになっていく」という自分づくり。追及していくべき「世界」のひろがりの実感とそれへの参加意識が芽生えている。

5) LPPでは学習とは、共同体の再生産、変容、変化のサイクルの中にあるとする。

全ての人は、つねに「将来の共同体」に向けての新参者である。「古顔」に安住している人は、可能性を自ら断っているにすぎない。

6) LPPでは学習をコントロールするのは、実践へのアクセスであるとする。

教材や教師の役割がここにあるとすれば、学習者にいかに本物の円熟した実践の本場(アリーナ)を当初から垣間見せて、そこへ「行ける」実感をもたせ、またたとえ周縁的であっても、そこにつながっているということが分かるような実践の手立てを講じるということである。

参考：『再生産』 P.ブルデュー & J.C.パスロン(1991)

●第1部 象徴的暴力の理論の基礎

・象徴的暴力を行使する力: 様々な意味を押し付け、しかも自らの力の根底にある力関係を覆い隠すことで、それらの意味を正統であると押し付けるに至る力。

・教育的働きかけ: 恣意的な力による文化的恣意の押し付けとして、一つの象徴的暴力をなすもの。

・生徒を愛情で満たすというやり方は、愛情を引き上げるという微妙な抑圧の手段も与えられるということで、恣意的な教育テクニックをなしている。

・送信の正統性を認めること、すなわち送り手の教育的権威を承認することが、情報の受容の条件となる。

・文化資本とは、種々の家族的教育的働きかけによって、伝達されてくるもろもろの財のこと。

●第2部 秩序の維持

・上層階級出資員の学生たちの有利さ

図 1

		言語資本	選別の度合	→	言語能力
民衆階級	パリ	-	++	→	+
	地方	--	+	→	-
中間階級	パリ	-	+	→	0
	地方	--	0	→	--
上層階級	パリ	++	--	→	0
	地方	+	-	→	0

＋と－で示された選別の相対的な度合は、様々な下位集団を特徴づける大学への進学率をおおよそ表しているものである。(付論参照)

- ・企業経営者の息子は、74%の大学進学チャンスを持っている。
- ・フランスの教育システムは、特権階級が独占している限り、正統として承認し、押し付けがちな文化への関係を習得する条件を独占している。
- ・正統的文化の教えこみの様式と連続性をもっている。
- ・この様式は、何が要求されているかをはっきりとはいわない。
- ・すでに受けている者でなければ完全に受容できないような教育と情報を与える。
- ・フランスの教育システムは、ヨーロッパの中で、試験を最も重視するもの。
- ・社会階級ごとに、離学率に差がある。
- ・学校は、既成秩序の再生産に寄与することができる。なぜなら、学校は、自らの果たしている機能を覆い隠すのに、最高度に成功しているからである。
- ・伝統的教育システムは、すべて社会の保守の機能に仕えるようあらかじめ傾向づけられている。
- ・教育システムの最も目に触れにくい、最も特徴的な機能は、その客観的な機能を隠ぺいする事、すなわち階級関係構造へのその関係の客観的真実を覆い隠すことにある。
- ・高等教育の就学人口の増加は、大学人口の民主化というよりも、恵まれない諸階級の代表が減少していることを覆い隠している可能性もある。

●解説

- ・ブルデューとパスロンは、「教えること」とは何か、それが成り立つための「社会的諸条件」は何かを執拗に問いかけている。
- ・大学特有語が、いかに排除、選別の具となっているか、またその点で有利さを享受するものが、いかに出身階級からの言語的有利さを受け継いでいるか、ということである。
- ・言語的有利さ＝言語資本
- ・教育的働きかけは、正統化された権威を通して行われる。
- ・教育的働きかけを、「文化的恣意」の押し付け、教えこみと規定。
- ・ハビトゥス：知覚、評価、行動などへの一定の態度性向？
- ・遺産相続の結果であるものを「天与の才」の表れと見なしたがる。この誤認に基づく正統化こそが、特権階級のイデオロギーに他ならない。

・コンクール(競争試験)で「能力が及ばなかったから」と観念し、結果を受け入れる。学校での選別が、社会構造の再生産に資することになる。

◆皆さんと意見交換したいこと

- ・自分たちが「Legitimate 正統的！」と、自信をもって言い切れないのが、今の時代の難しさでは？
(「正統的！」と思ってやっても、環境が変化し、いつの間にか時代遅れの「オワコンコミュニティ」になっている…)
 - ・その中では正統的に参加出来ていても、そのコミュニティ自体が、沈みゆく船だった場合もある。
どのコミュニティ(例:会社)に参加するかで、運命が決まる？(徒弟制と同じで、当たり外れが大きい)
それを避けるために、複数のコミュニティに参加する？
 - ・リモートワークだと、「参加」が難しくなっているのでは？ 物理的に近くにいない、観察がしづらい、コミュニティの一員だという実感を得にくい…。リモート下で、新参加者の参加を促すには？
 - ・「再生産」をひき起こしているのは、親の経済力？経済力がない親の元に生まれた子どもが抗うには？
-
-

●参考:

「デザイン・リアリティー ～半径300mの文化心理学」有元 典文, 岡部 大介
https://www.learn-well.com/blog/2009/09/post_276.html

「学習科学とテクノロジー」三宅ほなみ・白水始
https://www.learn-well.com/blog/2009/06/post_253-2.html

「未来の学びをデザインする」美馬のゆり・山内祐平
https://www.learn-well.com/blog/2009/06/post_254.html

2011年 東大大学院夏合宿
<https://www.learn-well.com/blog/2011/09/2011-2.html>

2010年 東大大学院夏合宿
https://www.learn-well.com/blog/2010/09/post_324.html

2011年6月~7月「組織開発研究会(シャカシャカ研)」
<https://www.learn-well.com/blog/2011/07/201167.html>

以上